

静かに養生するんですよ」

之が暗示となつて、僕はたしかに留置場の中に居るのではない。此處は畑の中の堀つ立小屋なのだ、いつのまにか思ふようになった。

雀の泣き聲が聞える。

畑にはネブカが青く生えてゐるかも知れない。

僕は握りめしを包んだ新聞を擴げて讀むようになった。

書いてある事が、皆自分に關聯してゐる事のように思つて、積善銀行の高倉爲三を、僕の弟だと思つたりした。

觀音經を讀む事と、夕、の詩を朗吟する事が、日課のやうになつた。

熱狂すると箸で錠前をガチャ／＼啄いて、三時間余も一つ事をやつたり、なつた繩を振り廻したりした。

有島から來た封緘はがきと、謄寫版刷の圖書目錄の這入つた封筒を、義母が持つて來た。

「田所のおぢいちゃんも九州から歸つて來て、酒をのむのを止めると言つてゐます。